



### 津幡町の六地藏

滝本 やすし

#### はじめに

六地藏は主に火葬場に造立された。石川県津幡町には現在火葬場は無く、昭和四十六年から同じ河北郡内にある内灘町の河北斎場利用となっている。津幡町の石仏は『野仏』（平成四年三月、津幡町公民館発行）に報告されている。これは婦人ボランティアたんぽぽグループによって、十年の歳月をかけ、同一箇所について数回の調査がされた詳細な報告書である。この資料などを参考に、津幡町の旧火葬場跡などに残されている六地藏を訪ねた。私も同一箇所を複数回調査したが、コロナ禍のため思うように聞き取り調査ができず祭礼等が現在も続けられているか等については多くの箇所不明である。

#### ①津幡町字領家墓地 角柱型浮彫り立像

墓地内に露座で並んでいる。『野仏』によると、昭和五十年頃に旧火葬場より、隣接する現在地へ移された。左端の一体の側面に「明治四十五年四月／管田吉三郎」と刻まれている。

#### ②津幡町字能瀬墓地 丸彫り立像

墓地の一角の小堂内に納められている。「六地藏の遷座」と書かれた由緒が掲げられており、昭和二十五年頃に区内の六氏によって旧火葬場前に造立され、昭和五十六年に現在地へ移されたことが記されている。

#### ③津幡町字舟橋旧墓地・旧火葬場 舟光背型浮彫り立像五体

旧火葬場跡に小堂が建てられており、十三体の地藏が納められている。左端に一石二尊、右端に一石三尊の小さな舟光背型浮彫り地藏立像がみられる。破損が激しいが、側面が不自然に削り落とされていることから、もとは一石六地藏だったのではないかと思われる。もともとの場所に造立されていたのか、他所から移されたのかは不明である。

#### ④津幡町字庄旧墓地・旧火葬場 角柱型浮彫り立像

旧火葬場跡の堂内に、大きな丸彫り地藏立像と共に残されている。最初は丸彫り地藏のみが堂に納められたが、その後大きな堂に建て替えられ六地藏もいっしょに納められた。丸彫り地藏の台石に「文化五戊辰四月／庄若連中」と刻まれているが、六地藏は無銘であり、造立年代はそれよりも少し下ると思われる。

#### ⑤津幡町字清水旧墓地・旧火葬場 角柱型浮彫り立像

『野仏』によると、もとは旧火葬場に造立されていた。津幡小学校建設の際に阿弥陀如来と共に鷹の松墓地へ移されたが、昭和三十年頃、旧地に近い現在地に小堂を建てて戻された。六地藏は三体ずつ台石に乗せられており、右の台石正面に「天保十三年／寅二月」と刻まれている。

#### ⑥津幡町字津幡路傍 丸彫り立像二組

倉見へと続く旧道沿いの堂内に十九体の地藏が納められており、その中に丸彫りの六地藏立像が二組みられる。この場所にはもとは一体の地藏が置かれていたが、大きな地藏堂が建てられ近隣の地藏十八体が集められた。

第65号  
 令和3年12月15日発行  
 編集と発行  
**北陸石仏の会**  
 (日本石仏協会北陸支部)  
 代表 平井一雄  
 〒939-1315  
 富山県砺波市太田  
 1770 尾田武雄方  
 電話 0763-32-2772  
 振替 00740-2-11974  
 (年会費 3000円)  
 ホームページ  
<http://odatakeo.wp.xdomain.jp/>

- ・津幡町の六地藏
- ・上大久保天満宮の立石
- ・石工中田梅岸
- ・第61回例会報告

後列の大きな六地藏は、現在の墓地に隣接していた旧火葬場から移された。『野仏』には慶応四年銘が報告されているが、常時施錠されているので確認できなかった。また前列の小さな六地藏も他所から移されたものであるが、もとの所在地は不明である。

### ⑧津幡町字加賀爪路傍 角柱型浮彫り立像

津幡中学校脇の延命地藏堂内にいっしょに納められている。六地藏と大きな丸彫り地藏は、もとは共同墓地に隣接する火葬場に置かれていたが、明治以降移転をくり返し、昭和四十年頃に現在地へ移された。

### ⑨⑩⑪⑫津幡町字倉見旧火葬場 角柱型浮彫り立像四組

津幡町倉見は、吉ヶ谷内、宮谷、出村、番道、大谷内の各集落からなっている。それぞれの集落の墓地に火葬場があつたが、昭和初期に一ヶ所にまとめられた。その際、それぞれの火葬場に置かれていた石仏もこの場所へ移された。しかし大谷内の火葬場にあつた阿弥陀如来だけはどうしても動かせず、現在でも大谷内の火葬場跡に置かれたままである。なお火葬場は一ヶ所にまとめられたが、墓地は各集落に残されている。地藏広場と呼ばれるこの場所には木造の建物(庵)が建てられていたが、取り壊されている。現在は木造の小堂が建てられており、丸彫りの阿弥陀如来立像一体と丸彫りの地藏立像二体が納められている。そして堂の右手には、角柱型の浮彫り六地藏が四組並んでいる。この六地藏も、近年その位置がずらされているようだ。堂内の阿弥陀如来は宮谷の火葬場から移されたものだが、両脇の地藏二体は何処の火葬場にあつたものか不明である。

堂のすぐ右手の六地藏は「倉見吉ヶ谷内」「嘉永七年寅二月建之」と刻まれている。他の三組は一列に並べられており、左の六地藏は「倉見村宮谷／同行中」「文久二年壬戌正月建之」、中央の六地藏は「倉見出村」「嘉永二己酉年十一月立之」、右の六地藏は「番道同行中」「嘉永六年丑正月立之」と刻まれている。これら四組の六地藏はほぼ同寸で同一の手法、そして同時期の造立であることから、同じの石工の作と思われる。寒念佛業によつて集められた資金で、各集落の火葬場に順番に造立されたと伝えられている。

### ⑬津幡町字川尻墓地・旧火葬場 丸彫り立像

墓地向かいの旧火葬場跡に、他一体の地藏と共に納められている。地藏堂の前に案内板が立てられており、大正五年に亡くなった子供の供養のため、家族によつて造立されたことが記されている。

### ⑭津幡町字南中条墓地 丸彫り立像三体

『野仏』には旧火葬場跡に三体の地藏が報告されている。鉄道建設に伴い、明治二十五年頃に旧々火葬場から移動されたものである。調査に向つたが、旧火葬場跡には見当たらず、近くの墓地入り口へ移されているのを確認した。これらの三体は、同寸、同一手法であり、それぞれの持物が異なることから、六地藏のうちの三体のように思われる。後に三体が失われたのか、最初から三体しか造られなかったのかは不明である。

### ⑮津幡町字太田旧墓地・旧火葬場 角柱型浮彫り立像

現在の墓地の裏手のうっそうとした竹林の中に旧火葬場跡があり、他二体の地藏と共に露座で並べられている。六体の各側面に明治八年から大正十二年にかけて亡くなられた九名の方々の戒名が刻まれており、右端の一体の側面に「大正十二年四月建立」と刻まれている。

### ⑯津幡町字八ノ谷旧火葬場 角柱型浮彫り立像

『野仏』には旧火葬場跡に露座の写真が掲載されているが、現在は小堂が建てられており、丸彫りの地藏二体と共に角柱型浮彫りの六地藏が納められている。一体の側面に「昭和十四年三月建」と刻まれている。

### ⑰津幡町字竹橋西墓地・旧火葬場 角柱型浮彫り立像

竹橋西墓地の一角に、角柱型浮彫り立像の六地藏が残されている。西墓地と東墓地に隣接していた火葬場はあわせて集落東外れの前坂へ移されたが、西墓地の六地藏は前坂へ移されなかった。六体共に持物が不明なほど破損が激しいが、よく見ると左から四番目の側面に「享和三歳■月」と刻まれているのが確認できる。『野仏』には建立年月日不明となっているので、見落とされたのであろうか。津幡町の在銘石仏としては、俱利伽羅不動寺境内の不動明王に次いで古いものである。

### ⑩津幡町字竹橋東墓地・旧火葬場 角柱型浮彫り立像

竹橋東墓地の一角に、角柱型浮彫り立像の六地藏が残されている。火葬場が前坂へと移された際に、東墓地に隣接する火葬場に置かれていた六地藏もいっしょに前坂の火葬場へ移動された。その後、昭和四十六年に河北斎場が新設され、もとの場所へ戻された。西墓地火葬場の六地藏と同じく破損が激しいが、ほぼ同寸で同様の手法であることから、同時期に同じ石工によって作られたと考えられる。

### ⑪津幡町字俱利伽羅路傍 丸彫り立像

俱利伽羅中ん坂の秀雅堂の向かいの堂内に、丸彫り六地藏立像が納められている。もとは、高野山真言宗長楽寺の参道脇の十王堂の向かいに子安地藏として置かれていたものである。長楽寺十王堂は天保七年に焼失しているの、六地藏の造立はそれ以前と考えられる。長楽寺は明治二年十二月、神仏分離の際に廃寺となり、手向神社のみが残された。俱利伽羅峠周辺の石仏の多くは、廃仏毀釈の際に個人宅に隠して守られ残されてきた。しかし、この六地藏についてはどのようにして守られてきたのか伝承が無く不明である。

### ⑫津幡町字上藤又路傍 丸彫り立像

もとは集落外れの湧水地に置かれていたが、現在は集落内のやや広い場所へ移されている。『野仏』には「昔、集落に赤痢がはよったり、水害があったりしたため集落を守っていたため建立した。」と記述されている。

### ⑬津幡町字湯端円照寺裏(所在不明) 角柱型浮彫り立像

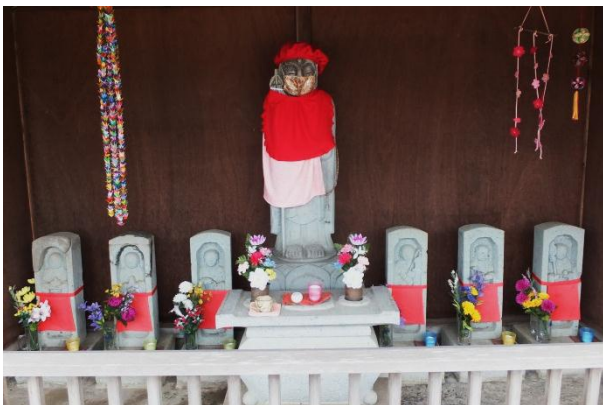
『野仏』には、円照寺の後ろに六体の角柱型浮彫り地藏立像が報告されている。調査に向ったが、所在を確認できない。他所へ移動されたのではないかと思いい近所の方々数名に尋ねてみたが、皆さん「記憶にない、たぶんそんなの無かったと思う」と返事が返ってくる。『野仏』には「建立年月日 昭和三十年三月」、「建立者 酒井た免」、「長い髪型をしているのは女の人、坊主頭は男の人」、「世話人 円照寺住職」等々の記述がみられる。長い髪型とあるのは、地藏ではなく観音であろうか。掲載されている写真も不鮮明ではっきりとしないが、六体の角柱型浮彫り地藏立像のように見える。

### おわりに

津幡町には角柱型浮彫りの石仏が多くみられる。二十一組の六地藏のうち十三組がこの型である。津幡町に隣接する金沢市や富山県小矢部市にも多くの六地藏が確認されるが、この型のは見られず、津幡町特有の形状のようである。角柱型浮彫りの六地藏を造立年代順に並べると：

竹橋西墓地旧火葬場↓清水旧墓地旧火葬場(年代は推定)↓加賀爪路傍(旧火葬場より移動)↓清水旧墓地旧火葬場↓庄旧墓地旧火葬場(年代は推定)↓倉見旧火葬場の四組↓領家墓地(旧火葬場より移動)↓太田旧墓地旧火葬場↓八ノ谷旧火葬場↓湯端円照寺(所在不明)

最も新しい湯端円照寺の一组を除く十二組が火葬場に造立された。さらに江戸時代に造立された九組の所在地は、全て北國街道に近い場所に位置している。特に竹橋と加賀爪は、街道沿いの宿場町として栄えた場所であった。当時の津幡宿は、現在の加賀爪地内にあった。また倉見は五つの集落から形成されており、浄土宗の専修道場(専修庵)が置かれ、浄土信仰の聖地と言えるような場所であった。



④庄旧墓地・旧火葬場



⑤清水旧墓地・旧火葬場



⑧加賀爪路傍



⑥⑦津幡路傍



⑨～⑫倉見地蔵広場(旧火葬場)全景



⑩倉見地蔵広場(旧火葬場) 旧宮谷火葬場の六地蔵



⑨倉見地蔵広場(旧火葬場) 旧吉ヶ谷内火葬場の六地蔵



⑫倉見地蔵広場(旧火葬場) 旧番道火葬場の六地蔵



⑪倉見地蔵広場(旧火葬場) 旧出村火葬場の六地蔵



⑰竹橋西墓地・旧火葬場



⑮太田旧墓地・旧火葬場



⑲俱利伽羅路傍



⑱竹橋東墓地・旧火葬場

## 石川県津幡町の六地藏一覽 2021/11/21 作成

番号	所在地	移動状況	形状	造立年	西暦	備考
1	領家 墓地	旧火葬場より移動	角柱型浮彫り立像	明治45年	1912	
2	能瀬 墓地	旧火葬場より移動	丸彫り立像	昭和		
3	舟橋 旧墓地・旧火葬場	不明	舟光背型浮彫り立像			5体現存
4	庄 旧墓地・旧火葬場	ほぼ移動なし	角柱型浮彫り立像			
5	清水 旧墓地・旧火葬場	鷹の松墓地へ移動後、戻された	角柱型浮彫り立像	天保13年	1842	
6	津幡 路傍	旧火葬場より移動	丸彫り立像	慶応4年	1868	
7	同	移動されているが、旧所在地不明	丸彫り立像			
8	加賀爪 路傍	旧火葬場より複数回移動→現在地	角柱型浮彫り立像	文化13年	1816	
9	倉見 旧火葬場	倉見吉ヶ谷内旧火葬場より移動	角柱型浮彫り立像	嘉永7年	1854	
10	同	倉見宮谷旧火葬場より移動	角柱型浮彫り立像	文久2年	1862	
11	同	倉見出村旧火葬場より移動	角柱型浮彫り立像	嘉永2年	1849	
12	同	倉見番道旧火葬場より移動	角柱型浮彫り立像	嘉永6年	1853	
13	川尻 墓地・旧火葬場	ほぼ移動なし	丸彫り立像	大正		
14	南中条 墓地	旧々火葬場→旧火葬場→現在地	丸彫り立像			3体現存
15	太田 旧墓地・旧火葬場	ほぼ移動なし	角柱型浮彫り立像	大正12年	1923	
16	八ノ谷 旧火葬場	ほぼ移動なし	角柱型浮彫り立像	昭和14年	1939	
17	竹橋 西墓地・旧火葬場	ほぼ移動なし	角柱型浮彫り立像	享和3年	1803	
18	竹橋 東墓地・旧火葬場	竹橋前坂火葬場へ移動後、戻された	角柱型浮彫り立像			
19	俱利伽羅 路傍	長楽寺参道の子安地藏堂より移動	丸彫り立像			
20	上藤又 路傍	近くの湧水地より移動	丸彫り立像			
21	渦端 円照寺(所在不明)	他所(遠方)へ移されたと思われる	角柱型浮彫り立像	昭和30年	1955	

# 上大久保天満宮の立石

平井 一雄

一、富山市上大久保天満宮参道の二基の立石について詳述する。

伊藤曙覧著『越中の民俗宗教』によると神社の鳥居の前に、よく大きな立石が見られる。富山県下では呉東地域の全域に分布し、射水・砺波・氷見ではまったく見られない。

神社建築以前の聖域を示すものといわれる。

石仏研究家の西田栄一氏は自然石祭祀の磐座・磐境（いわさか）信仰が鳥居・神社の原型だったのだろうと論考されている。

上大久保天満宮の立石は高さ2・8m、幅1・8m、厚さ1・3mの安産岩を二つに断ち割り参道入口の左右に立てたもので、後方の二基の鳥居の前に立つのであるから、さしずめ一の鳥居といってもよいと思う。

私が見た周辺神社の立石では一番大きくて立派なものである。二の鳥居は、今は石造八幡鳥居であるが前身の木造両部鳥居は明治四十二年に建てられたといわれている。後述の資料により立石建立は明治三十九年頃との記述から木造両部鳥居以前の建立となる。

天満宮の建立は明和二年（一七六四）といわれるから、もっと小さい立石があったのではないだろうか。

二、天満宮拜殿の奉納額

「大久保天満宮前立石のいわれ」

この巨岩は大沢野町幸町の通称カングク山にあったもので約十トンもあります。明治三十九年頃の春に運び出し建立されましたが当時、その作業は困難をきわめました。石には藁で編んだ太い縄を結びつけ、これに乗せる「そり」の代用には二つに割った青竹（モウソウ竹）が用いられました。砂利道の飛驒街道（旧国道）などにこの「そり」をぎつしりと敷き並べては村中の若い衆は勿論、年寄り・女性らが総出で「よ

いしょ」「よいしょ」と一寸ずり引つ張つて来ました。村人達のその時の格好は、はち巻きにたすきがけ、それに、「わらじばき」といったもので文字通り必死の作業でしたが音頭取りの木遣りも入つて実に、にぎやかでした。こうした一大事業は時の総代神保幾次郎（神保一郎氏の先々代）世話人代表清水長太郎氏（清水邦光氏の分家、子孫は岐阜県神岡町に在住）らを中心に進められたもので大石を運び出す当日は未明近くから行われたもの日も西に暮れる頃やつと天満宮前に到着その晩は夜遅くまで祝い酒がふるまわれました。この大岩を現在のような格好に二つに割つたのは当時乱積みの名人といわれた石工で下大久保一区の浦田氏方に住んでいた藤瀬氏（上大久保丹破島八木氏の娘婿で子孫は長野県に在住）でした。

左右の石を見ればわかるように精魂込めて見事真つ二つに割つたその腕はやはり大したものであつたといえます。

立石のいわれは宮総代松本梅吉氏長谷寅治を受けてまとめたものです。上大久保部落にはなんの古文書もなく古老の記憶にたよるしかありませんでした。中でも不肖私の父作次の記憶におうところが多かつたことを併せて記しておきます。

昭和五十七年三月 総代 神島文一郎

また平成元年発行『大久保地区上大久保郷土誌』には次の様に書かれています。

「飛驒街道添いの建石」

天満宮参道の入口両側の建石は明治三十九年稲代の監獄山にあったものを街道に青竹を敷き、その上を櫃にのせて上大久保住民総出で引いて来た物で重さ約十トンで石工は当時、上大久保に在住していた藤瀬某であつたがこの石について次のような逸話がある。

「石工の藤瀬さんが石割用矢を入れて日暮になつたのでそのまま帰つたが翌日現場へ行つて見るとその石が二つに割れていたの、これは神様の力だといつて感謝したという話」しかしこの話の真偽の程は定かでない。

『大久保地区上大久保郷土誌』添付の「明治二十六年以後の町並みの変化その一」には、前田久義宅屋敷に大正五年藤瀬石工梅次郎と記されているので、この立石を加工した石工ではないだろうか。



上大久保天満宮参道入り口の立石



左立石の矢跡



立石を神社より見る



天満宮立石のいわれ奉納額



立石を見る人たち



旧両部鳥居の台石

## 石工中田梅岸

尾田 武雄

昭和五十五年ごろに、地元の太田公民館主事を仰せつかっていました。私の母が亡くなったのが同年五月でもあった。当時の金子喜久子婦人会長から、太田地区に石仏がたくさんあるから悉皆調査を行いたいとの申し入れがあった。私は郷土史や石仏に関心があり、即座に快諾した。地元には民俗や郷土史に詳しい佐伯安一先生がおられ、その指導の下に調査が行われた。砺波市教育委員会の指導を受け「砺波市婦人ボランティア活動講座」の一環で、県教育委員会の助成なども受けた。石造美術研究家京田良志先生の講座なども組まれた。一年で一一九体の調査報告ができ、報告書も発刊された。その中で印象に残るのが中筋往来西国三十三か所観音石仏の二十九番馬頭観音(写真1)である。川石の大きさのバランスよく均整のとれた石仏である。

これは太田地区と中野地区との村境にあり、道端に一体、威風堂々と鎮座されている。銘文も正面上部に「廿九番」、右側面に「石工中田梅岸」、左側面に「松尾寺」とあり、裏面に「安政二年卯二月 施主宗右衛門」とある。この「石工中田梅岸」には、長く気に留めていた。現在は「中田」の銘が剥離している。

砺波市三合の信号機のある交差点わきには名号塔(写真2)がある。ここには左側面に「中田梅岸」とあることは知られていた。ちなみに横にある阿弥陀如来立像は全体的で古様である。この梅岸の石仏については、佐伯安一先生の写真ネガの中から、高岡市二塚の西広上にある地藏立像を見つけた。(写真3)裏面には「安政二乙卯年八月建之 石工中田梅岸」とはつきり刻んである。「中田石工梅岸」と刻まれた石造物は、二体の石仏と一基の名号塔があることがわかった。

ところで最近、高岡市中田の神社調査に同行させていただき、中田移田八幡宮に所蔵される絵馬に「梅岸画」と署名された黒馬があることが分かった。

この地区でも著名な絵師でもあったのであろう。約四十年か、気にしていた石工について少しずつわかり始めた。

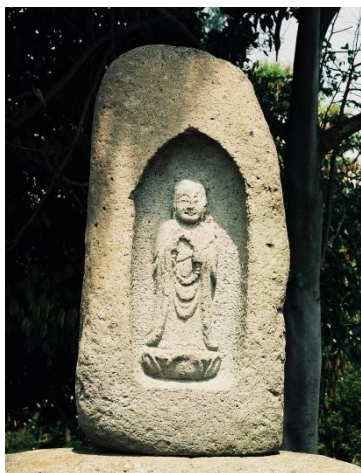


写真3 二塚西広上の地藏



写真1 中筋往来の馬頭観音



写真4 移田八幡宮の絵馬

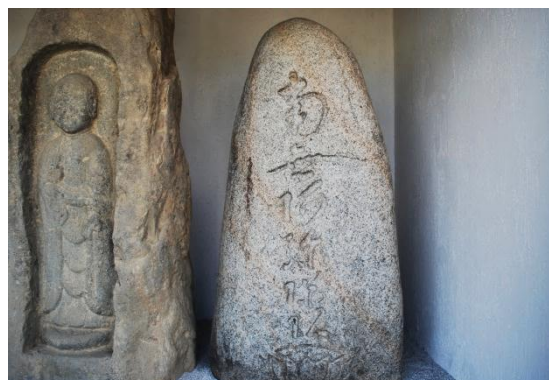


写真2 三合の名号塔



## 第61回例会報告(高岡市伏木の石仏めぐり)

清水 邦彦

私が北陸に住み始めて二〇余年が経つ。JR氷見線の駅があることから伏木という地名があることは知っていたが、かつては北前船が立ち寄った港町であり、また貴重な石仏・石神が多数あることは正直知らなかった。ということで今回の例会は私に取って大変貴重な経験であった。以下、滝本さんが作成し、当日配布された資料を参考にしつつ、私なりに調査した石仏等を紹介する。当日はかなりの数の石仏・石神を調査することができたが、字数を鑑み、一部のみ紹介する。

### ○伏木古府一丁目 路傍／聖徳太子二歳像

梅林寺(曹洞宗)門前にある小堂内に安置されている。高さは一メートルもなく、赤い帽子を被っていることから、ぱっと見、地藏像のように見えるが、袴を穿ていることから聖徳太子二歳像である。梅林寺関連のものでなく、真宗民俗として地元の人々が造立したものと推測される。堂内に収められている石版には「太子堂改築／平成十三年六月／串岡自治会一同」とある。

梅林寺参道には、准胝観音像・双体地藏像・半跏地藏像が安置されている。

### ○伏木古国府 路傍／馬頭観音像

旧道沿いの小堂に三面八臂の馬頭観音像が一体安置されている。明治時代、伏木地域において馬による輸送が盛んであった名残である。

### ○伏木古府元町 長徳寺(曹洞宗)／青面金剛(庚申)像・如来形坐像・地藏像等

長徳寺(曹洞宗)境内の小堂に複数の石仏が安置されている。如来形坐像は中世造立とされる。

### ○伏木古府 正法寺(曹洞宗)／伏木八十八ヶ所霊場石仏等

正法寺(曹洞宗)の裏手に四国四十八ヶ所を模した(うつし)石仏群が安置されている。昭和初期に造立されたものである。第九番は釈迦涅槃図を立体的に現したものであり、寝姿の釈迦像の周辺には丸彫りの人物像・動物

像が安置されている。

### ○伏木一宮一丁目 路傍／如来形坐像・五輪塔等

万葉歴史館近くの路傍の小堂に如来形坐像・五輪塔等の中世石造物が安置されている。いずれにも赤い帽子が掛けられている。近隣には小規模墓地が二ヶ所ある。見たところ、墓地はいずれも寺と密接に関連したものでなさそうであった。そうであれば、かつてこの辺りは今より広範囲に亘って死者供養の場所であった可能性がある。そして当該の中世石造物はこの辺りの土中より発掘されたものであり、それらが集められ、小堂に安置されるようになった、という仮説を提示することができよう。

### ○伏木一宮二丁目 国分寺(真言宗)／四国八十八ヶ所霊場石仏・半跏地藏像等

伏木一宮一丁目にある国分寺は、越中国分寺跡に建てられたものである。薬師堂が本堂の代わりとなっている。木造文殊菩薩坐像(富山県指定文化財)が著名だが、薬師堂内には、これ以外にも様々な仏像(木造)が安置されている。

境内を囲むように、四国八十八ヶ所霊場石仏が安置されている。おそらく江戸時代造立であろうから、国分寺が江戸時代に活動していた可能性を示唆している。

石仏群右手には小堂があり、約一〇体の地藏像が安置されている。小堂の右には半跏地藏像が安置されている(露座)。

### ○伏木国分二丁目 天満社／半跏地藏像二体

天満社の祭神は当然、菅原道真である。注目すべきは門前に半跏地藏像が二体安置されていることである。左の一体は宝珠が欠けており、二体とも摩滅が激しい。天満社は、かつて近隣にあった八幡社及び万度社を合祀している。合祀された両社はいずれもその名称から仏教的神社と想定される。二体の半跏地藏像はいずれも両社のご神体であった可能性があるが、詳しいことは分からない。

### ○伏木中央町 路傍／地藏像・阿弥陀像・釈迦像

地藏堂に数体の地藏像・木造金色の阿弥陀像一体・木造金色の釈迦像一体

が安置されている。地蔵の利益は火防である。

### ○伏木古府一丁目 路傍／聖徳太子二歳像・地蔵像

JR氷見線新島踏切付近の小堂に聖徳太子二歳像・地蔵像が安置されている。

### ○伏木古国府 路傍／聖徳太子像等

勝興寺（浄土真宗）の参道沿いにある太子堂に聖徳太子像等の仏像が数体安置されている。聖徳太子像は曲尺を持っている「写真」。厩戸皇子（五七四〜六二二）は没後、聖徳太子と呼ばれるようになり、種々の伝承・伝説が生み出されてきた。聖徳太子を職人の神様とする伝承もその一つであり、さらに曲尺は聖徳太子が発明したという伝説もある<sup>三三</sup>。ゆえに「聖徳太子像が曲尺を持っている」ことは奇異なことではない。曲尺を持っている聖徳太子像は絵像に多いが、滝本さんによると、北陸地方において石造のものがこの事例以外に少なくとも二体あるそうである（富山県立山町及び福井県あわら市に各一体）。一度、自分の目で当該の二体を確認したいと思っている。



<sup>三二</sup>松尾剛次『中世叡尊教団の全国的展開』（二〇一七年、法蔵館）には、「（補―越中国分寺には）現在は鎌倉末期の文殊菩薩像が残っているだけであり、…」（二九三頁）とあるが言葉足らずである。

<sup>三三</sup>吉原健一郎「聖徳太子と職人」（宮田登・坂本要編『俗信と仏教』一九九二年、名著出版）・中上敬一「職人の聖徳太子信仰」（『日本の石仏』一三二号、二〇〇九年）。

<sup>三三</sup>竹中大工道具館HP「曲尺の機能」<https://www.dougukan.jp/tools/06> 最終閲覧日二〇二一年一月二三日

## 第61回例会報告(高岡市伏木の石仏めぐり)

佐野 幸子(砺波市)

「北陸石仏の会」に初めて参加させていただきました。10月10日、第61回例会「高岡市伏木の石仏めぐり」スゴいツアーでした。

朝から夕方まで、どれだけの石仏をみたことでしょうか。人生この年まで、知りませんでした。なんとも素晴らしい会です。尾田武雄大先生、この方に出会わなければ、こんな世界を知る事はありませんでした。

埼玉県から砺波市に来てもうすぐ一年です。

文化レベルの低い私、石仏だけでなく、浄土宗・曹洞宗と言われても名前しか知りませんので、一つ一つ学んでいくしかありません。

手づくりの冊子、素晴らしい解説と写真もあり、実際の石仏と照らし合わせながら、十七か所廻りました。

特に印象に残ったのは、正法寺の四国八十八ヶ所霊場石仏、釈迦涅槃像。その周辺には泣いている人物や動物の石仏が配置されており、お釈迦様が亡くなられたときの物語が描かれています。釈迦の母、摩耶夫人が釈迦を助けようと天上から薬を投げたが、沙羅双樹に引っかけられ釈迦には届けられませんでした。そこで「投薬」という言葉が生まれた、ということとを尾田さんよりお聞きしました。

薬剤師である私は知りませんでした。

そんな、素敵なお話を聴ける北陸石仏の会にお仲間に入れてください。勉強させていただきまます。お世話をしてくださった方々に心より感謝申し上げます。次が楽しみです。

